

だいせんねんぶつおどり
大川念仏踊

琴南地区 中と

大川念仏踊は、旧暦6月14日に近い日曜日、大川山の頂上に位置する大川神社で、雨乞い※₁を祈願して奉納される念仏踊※₂です。大川神社での奉納後、大川神社境内※₃の秋葉権現※₄、同じく境内の龍王社※₅、そして山を下り、中通八幡神社、新生の龍王社、最後に天川神社に奉納されます。

大川神社は社伝によると、文武天皇の御代※₆に役小角※₇が大川山の頂上に来た時、大山祇神※₈のお告げを受けて、祠※₉を建てこの神をまつたことに始まるとされています。

大川神社が鎮座※₁₀する大川山は、香川で2番目に高い山で、標高は1042.9



m です。大川山に降った雨は、古くは大川と呼ばれ、香川で唯一の一級河川※₁₁土器川に流れ込みます。そのため、土器川沿岸には氏子が居住していない地域でも、雨乞いの神として大川神社信仰があります。

大川念仏踊の起源※₁₂は不明ですが、地元には、「国中が大旱魃※₁₃にみまわられていた天平4もしくは6(732 もしくは734)年6月、国司※₁₄が大川神社に奉幣※₁₅して雨乞いの祈願をした。その時、祠の前の小池から1匹の白蛇がはい出



中踊の様子 大川神社への奉納 令和2年8月2日撮影

し、竜^{りゅう}になって空へ昇^{のぼ}り、雲を呼んで大雨を降^{かん}らせた。その土地の人々は歡喜^きして、鉦^{かね}を打ち鳴らして踊^{くる}り狂った。それ以来、大川神社は、雨乞いの神として歴代の国主^{れきだい}※16、また人々から厚く信仰された。」という言い伝えがあります。寛永5(1628)年、高松藩主生駒高俊^{いこまたかし}※17が雨乞い祈願のため鉦35丁を寄進した記録があります。このことから、この頃には大川神社



寛永5(1628)年、高松藩主生駒高俊が寄進した鉦の雨乞い祈願は世に知られ、既に氏子によって大川念仏踊が奉納されていたのではないかと推測されます。

特徴としては、他の地域の念仏踊では大人が担当する中踊^{なかおどり}を主に子供が担い、大人が補佐すること、県内の念仏踊の大半が滝宮天満宮^{たきのみやてんまんぐう}※18におもむき奉納しますが大川念仏踊は大川神社に奉納することなどがあります。

現在、奉納は琴南地区の中通、造田、満濃地区の炭所西の大川神社氏子が担っています。

参考文献 琴南町誌、琴南町、1986
大川念仏踊、大川念仏踊保存会、1999
全讃史、中山城山、1828



宮巡り※19の様子

昭和32年7月11日(旧暦6月14日)撮影

現在の踊の構成

ひとまとい

大川念仏踊の一切を取り仕切る。

棒振

踊を妨害するものを防ぎ、入庭(入場)には先頭に立って場取りをする。

貝吹

ほら貝を吹いて合図をし、踊の進行をはかる。

中踊

子供踊。念仏踊の主役。下知、太鼓、鉦の3人一組で、右回りに踊る。

下知

表は日月、裏は雨雲と波の絵が入った大きな団扇を持って踊る。

太鼓

胸につけた太鼓を両手に持った杵で打ちながら踊る。

鉦

鉦を持ち、打ちながら踊る。

警固

各地区の氏子に割り当てられる。3色の色紙をつけたものを被り、鉦と団扇を持った総勢71人が、中踊を中心に周囲を取り巻き、「ナムアーミドヤー」と音頭をとる。



全体の様子 平成20年7月13日撮影

※1 日照りが続き作物に被害が出そうなときに、雨を降らせるよう神仏に祈る行事。※2 念仏を唱えながら鉦や太鼓を打ち鳴らし踊る民俗舞踊。※3 神社、寺院の敷地内。※4 火災を防ぐ神。※5 水の神をまつお社。※6 天皇の治めた期間。※7 奈良時代の山岳修行者。呪術者。諸国をめぐって修行し修験道を開いた人とされる。※8 山の神。伊弉諾尊の子。※9 神や先祖をまつところ。※10 神がひとところに落ち着き留まっていること。※11 国土の保全または国民経済上、特に重要な水系で、河川法によって指定された河川。※12 物事の始まり。※13 日照り。特に農作物に必要な雨が長い間降らないこと。※14 律令制で中央から派遣され地方政務を行った役人の長官。※15 神に供え物を捧げること。※16 地方の一国を治める最高の位の人。※17 1611-1659 生駒家三代目当主。※18 香川県綾歌郡綾川町にある神社。祭神は菅原道真。毎年奉納される「滝宮の念仏踊」は国の重要無形民俗文化財に指定されている。※19 踊の後、ほら貝を合図に棒振、下知、太鼓、鉦、貝吹、幟、警固の順に「ナムアーミドヤー」と唱えながら本堂の周りを3周し、参拝する。

